

特集：

図書館における日常と非常時をつなぐ光環境のデザイン

小林 茂雄

1. 図書館の空間特性と非常時の課題

公共施設には、日常利用における快適性（平時の利用しやすさ）と、災害発生時における安全性（非常時の対応能力）の両方を満たすことが求められる。図書館も例外ではない。地域の知的基盤として人々を受け入れると同時に、災害時には避難場所および情報提供の拠点となる役割を担っている。しかし、図書館の空間構成には、平時の快適性と引き換えに、非常時の空間認知や移動を妨げる要因が潜んでいることに注意しなければならない。

図書館では、書籍の保存性と落ち着いた閲覧環境を確保するため、直射光を避けた照明計画が一般的に採用される（図1参照）。強い光は書籍の劣化を招き、利用者に視覚的な負担を与えるためで

ある。その結果、壁面には高い書架が連続し、外部に面した窓が限定される構成が多い。この構成は蔵書を管理するという点では合理的である。一方で、屋外との視覚的つながりが弱まり、利用者が「自分が建物内のどこにいるか」ということを直感的に把握しにくくさせる。

さらに、並列する書架は視線を遮るので、空間全体の見通しを悪くする。平常時であれば案内サインやゆっくりとした歩行によって補えるが、停電や避難といった緊張が高まった状況では、同じ構成が迷いや不安を引き起こす。不安が高いほど人は視覚的な手がかりに依存するが、視線が遮られることで方向感覚を失いやすくなる。したがって非常時には、「自分がどこにいて、どちらへ向かうべきか」を即座に判断できるような光と空間構成の設計が、安全確保に関して重要になる。

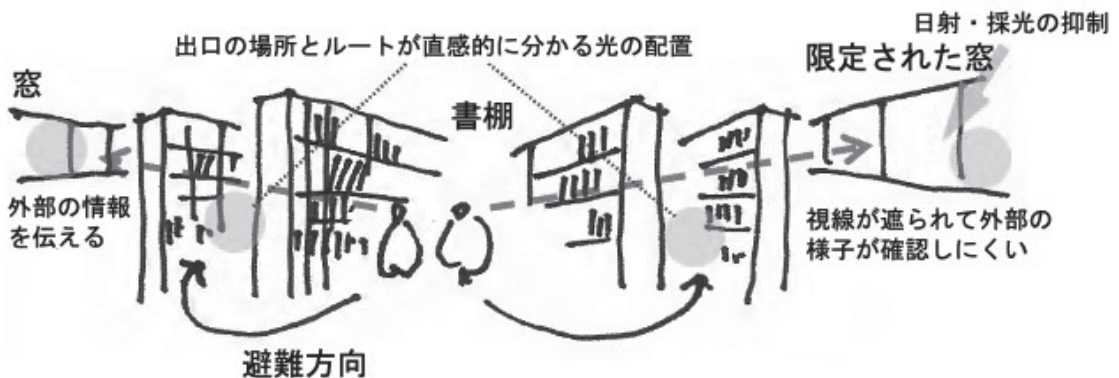


図1 図書館内部における閉鎖性と避難方向の認知

書架が視線を遮ることで、館内から外部の状況を把握しにくく、限られた窓だけでは避難方向を直感的に判断することが難しい。こうした環境においては、非常時に利用者が迷わず出口へと向かえるよう、主要な出口や通路に光を配し、視線誘導を促す照明計画が求められる。

2. 夜間災害時における空間認知と「導く光」——

夜間に災害が発生した場合は、図書館の光環境に潜む課題はより顕著になってくる。多くの図書館は、読書や作業のために空間全体を均質に照らしている。しかし、この均質な光は停電によって突然失われると、利用者は周囲の状況を把握しづらくなり、心理的な不安や行動の混乱が生じやすい。

このため、平常時から「明るさを均一にすることだけに頼らず、自然光や陰影の変化を適度に取り入れるようにしたい。空間の特徴が読み取れる光環境を整えておくことが有効である。特に動線や出口となる場所に光を重点的に配置することで、静かな雰囲気を妨げることなく、非常時には避難方向を直感的に示すことができる。これは「非常時に突然使う照明」ではなく、「日常の中に非常時を想定した手がかりを組み込む」光のデザインである。

また、図書館は夜間においても、地域の中で位置や存在を知らせる「目印」として機能する。災害時に必要なのは、単に空間を明るくする光ではなく、利用者に「どちらへ進めばよいか」を示す光である。たとえば、入口や屋外広場へ向かう通路に適切な間隔で配置された照明があるだけでも、人は自然に進路を理解できる。これは必ずしも強い光やシームレスに連続する光である必要はない。

日常的に人が集まる図書館だからこそ、夜間に建物の位置と形状を示す光を備えておく和良好的。それは、視認性の確保にとどまらず、避難時の空間認知を支える公共性の高い意味を持つ。図書館は知の拠点であると同時に、非常時には人々を導く「光のランドマーク」となりうるからである。

3. 非常時を前提とした光のデザイン ——

多くの図書館では夜間も空間全体が明るく保たれている。しかしその明るさに慣れている利用者ほど、停電時の急な暗転に強い戸惑いを覚えやすい。一方で、夜間照度を適度に抑えた環境であれば、暗さへの移行はより緩やかとなる。利用者は

状況変化を受け止めやすくなり、冷静な行動につながるだろう。夜間は本来、暗さを基調とした時間帯であり、光が必要となる位置に必要な量だけ配置されることが望ましい。

空間認知とは、自分の位置と進む方向を直感的に理解することである。しかし図書館では、並んだ書架が視線を遮るため、もともと空間全体の構成が把握しにくい。特に利用経験の浅い人ほど、災害時には避難方向の判断が難しくなる。ここで重要となるのが、「考えなくても進むべき方向がわかる」誘導である。その最も基本的な手がかりが光である。

光は、その高さや明暗の差、点在の仕方によって、人の移動方向を自然に示すことができる。避難経路に沿って目印や折れ曲がりの部分に光が連なっていれば、利用者は思考を挟むことなく、「光の続く方へ進む」という極めてシンプルな判断で避難を開始できる。逆に空間全体を均一に明るくした場合、明暗の差という手がかりが失われ、方向性は曖昧となり、咄嗟の判断が遅れる可能性がある。

夜間は、わずかな光の差にも人が敏感に反応する時間帯である。平常時から「照らすべき場所を選んで照らす」照明計画をしておくことで、停電時にも光と空間の形状が避難行動の手がかりとして機能しやすくなる。夜間照度を抑えた照明は、生体リズムに寄り添った環境づくりであると同時に、非常時に人を確実に導く安全な基盤でもある。図書館に求められるのは、必ずしも一様な明るさではなく、役割に応じて構成された光である。

4. 地域における図書館の光と空間認知 ——

図書館は、地域における「場所の印象」を形づくる拠点となる。夜の都市空間において、人は単に光の強弱だけではなく、光が生み出す雰囲気や象徴性を手がかりに、周辺環境を理解している。駅前広場や神社参道などで感じられる「その場所らしさ」は、光が空間の輪郭や方向性を穏やかに示し、そこに人々の記憶や体験が重なることで成立している。つまり、夜間の空間認知においては、明るければ良いのではなく、「記憶に残る光」が

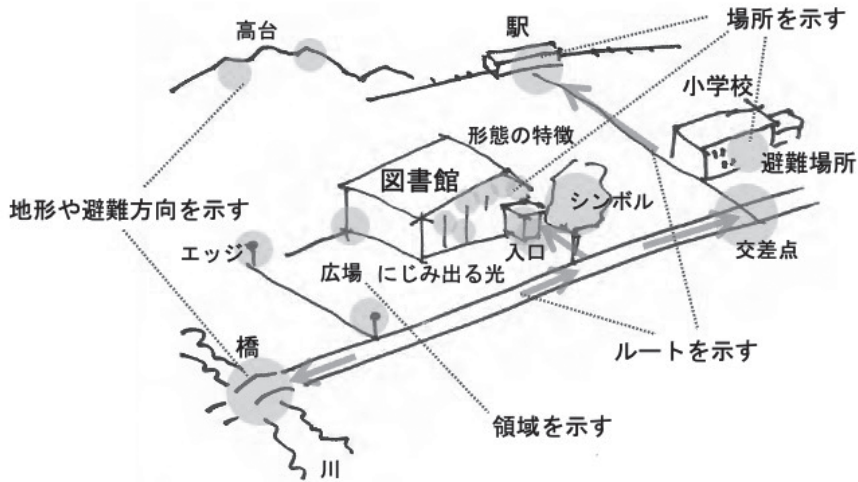


図2 周辺環境と連続する外周部の避難誘導照明

図書館を図書館として認識させる建築的特徴に加え、駅や小学校（避難場所）といった地域のランドマーク、そして川や橋などの地形の手がかりを、照明によって可視化する。外周部の縁（エッジ）や広場といった領域、交差点、移動ルートを光で示すことで、方向性の一貫した避難誘導を実現する。



図3 多摩市立中央図書館の外構照明

勾配屋根を間接光で柔らかく照らすことで、建築形態の特徴を際立たせるとともに、人の気配が感じられる温かい外観をつくり出している。館内と隣接する災害時の避難場所として指定されている公園の色温度を揃えることで、内部と外部の光環境が緩やかに連続し、空間的な一体感を保っている。



行動を支えているのである。

この視点に立つと、図書館が地域における拠点性を示すために必要なのは、建物全体を派手に照らすことではなく、地域にとってのシンボルとなる「図書館らしさ」を静かに象徴する光である。具体的には、次のような構成が考えられる（図2参照）。

- ・入口周辺の樹木を柔らかな光で照らし、来訪者を迎える。
- ・建物の輪郭や素材感を読み取れる照明で、形態的特徴と存在感を示す。

- ・内部の灯りが外部へほのかに滲むことで、図書館が「地域に開かれた場」であることを表現する。

これらの光が設けられることで、遠景からの視認性を高めるだけでなく、「ここが図書館である」という場所の記憶と結びつきやすくなる。非常時には、この記憶が避難方向の判断を支え、図書館は人々を導くランドマークとして機能する。

重要なのは、図書館を単独の避難拠点として考えるのではなく、地域全体の避難ネットワークの中で照明を計画する視点である。また図書館だけ

でなく、周辺に立地する避難所、小学校、駅、高台などについても考えておきたい。交差点や歩行ルートに沿って点在する光でゆるやかにつなぐことで、暗闇の中でも人々は地形や方向を身体的に把握しやすくなる。これは、地図やサインによる「読む誘導」ではなく、身体感覚に訴え、光による「自然に進む方向が理解される」誘導であるといえる¹⁾。

図3は、東京都多摩市立中央図書館（多摩中央公園内）の外構照明の例である。公園入口と広場に対する建物の位置関係に加え、人が滞在する内部空間の気配が外部へにじんできている。住宅を思わせる穏やかな屋根形状が夜間に浮かび上がり、遠景からも存在が読み取れる。こうした光によって、周囲に人の気配を生み、暗闇の中で公園へ人を導く働きをしている。

このような照明計画は、図書館内部の防犯・安全確保という直接的な目的に加えて、地域全体の防災力を底上げするインフラともなる。さらに、職員の方々が日常的に、夜間における避難経路やその視認性を実際の暗さの中で確認する訓練を行うことで、運用面における実効性は一層高まると考えられる。

5. 日常と非常時をつなぐ光環境の設計 ——

災害対応というと、非常時専用の照明や設備を新たに付加することに目を向けがちである。しかし、この認識こそが課題である。実際に避難行動を支えるのは、非常時にだけ作動する特別な光ではなく、日常の中で「見慣れている」光環境、すなわち平時の記憶に紐づいた光こそが、非常時の直感的な行動を導くことが鍵となる。図書館は学習・読書の場であると同時に、「集まれる場所」「戻れる場所」「頼れる場所」として地域社会に深く根付いた存在である。したがって、非常時にのみ特異な照明を点灯させるのではなく、平常時から用いられている光の配置、明暗のリズム、空間の明るさの流れが、そのまま避難誘導の基盤として

機能することが望まれる。

このように、光環境を日常の延長線上として非常時に対応するよう設計することで、図書館は地域にとって揺るぎない拠点となる。図書館を中心とした光の計画は、地域の安全性を高めることに加え、学びと交流を支える場としての価値を補強する。さらに、夜間景観に対しても柔らかな象徴性と文化的意味合いを付与するだろう。

（こばやし しげお・東京都市大学 建築都市デザイン学部 教授）

1) 小林茂雄・角館まさひで:空間認知に基づいた広域の避難照明の考え方, 照明学会誌, Vol.108, No.3, pp.128-130, 2024年5月